

中村俊定文庫  
文庫 18  
558



安永九刊  
原題簽十

紀行三千里

涼袋著  
素外編



棟揚乃吹うひくし山操

とてしを忘れりしの料羽是えて語る  
今をききりおとめをわと

操干よとても言し雪をみ峰

あけぬる夜さあ影に鳥川す裁してとて  
ハキまふ乃おとてのそれき<sup>い</sup>夜<sup>い</sup>のま<sup>い</sup>や<sup>い</sup>歌  
み<sup>い</sup>の<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>や<sup>い</sup>切<sup>い</sup>き<sup>い</sup>行<sup>い</sup>木<sup>い</sup>曾<sup>い</sup>お<sup>い</sup>山<sup>い</sup>の<sup>い</sup>う<sup>い</sup>  
燈<sup>い</sup>の<sup>い</sup>曲<sup>い</sup>け<sup>い</sup>て<sup>い</sup>海<sup>い</sup>間<sup>い</sup>乃<sup>い</sup>風<sup>い</sup>涼<sup>い</sup>し  
講<sup>い</sup>乃<sup>い</sup>涼<sup>い</sup>し<sup>い</sup>卯<sup>い</sup>乃<sup>い</sup>花<sup>い</sup>今<sup>い</sup>を<sup>い</sup>は<sup>い</sup>わ<sup>い</sup>の<sup>い</sup>う<sup>い</sup>ふ

草み<sup>い</sup>の<sup>い</sup>う<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>て<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>も<sup>い</sup>海<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>の<sup>い</sup>み<sup>い</sup>ぬ

塩尻<sup>い</sup>乃<sup>い</sup>腰<sup>い</sup>打<sup>い</sup>の<sup>い</sup>け<sup>い</sup>て

備<sup>い</sup>士<sup>い</sup>乃<sup>い</sup>来<sup>い</sup>て<sup>い</sup>う<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>を<sup>い</sup>飯<sup>い</sup>筋<sup>い</sup>も<sup>い</sup>は<sup>い</sup>る<sup>い</sup>み<sup>い</sup>が

桔梗<sup>い</sup>の<sup>い</sup>原<sup>い</sup>

む<sup>い</sup>の<sup>い</sup>三<sup>い</sup>軍<sup>い</sup>此<sup>い</sup>を<sup>い</sup>破<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>て<sup>い</sup>唯<sup>い</sup>一<sup>い</sup>将<sup>い</sup>乃<sup>い</sup>呂<sup>い</sup>や<sup>い</sup>や  
し<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>し<sup>い</sup>夫<sup>い</sup>を<sup>い</sup>入<sup>い</sup>る<sup>い</sup>乃<sup>い</sup>能<sup>い</sup>原<sup>い</sup>と<sup>い</sup>事<sup>い</sup>つ<sup>い</sup>保<sup>い</sup>み<sup>い</sup>乃<sup>い</sup>侍<sup>い</sup>も  
あ<sup>い</sup>と<sup>い</sup>能<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>なり

田<sup>い</sup>ノ<sup>い</sup>所<sup>い</sup>水<sup>い</sup>乃<sup>い</sup>指<sup>い</sup>周<sup>い</sup>も<sup>い</sup>圃<sup>い</sup>の<sup>い</sup>如<sup>い</sup>

負<sup>い</sup>て<sup>い</sup>ぬ<sup>い</sup>旗<sup>い</sup>危<sup>い</sup>も<sup>い</sup>あり<sup>い</sup>雨<sup>い</sup>乃<sup>い</sup>能<sup>い</sup>峯<sup>い</sup>

向き心乃物もあきて都をなほるるも花は咲  
雪も降りてとほく柳も青のくみよりの花も  
あこよひさし秋の光もあつてもさきも  
まよひもあつて山乃谷川乃阻とつふ  
て今も山路も暑くもみ新はた  
日数はとも里美深き山路うらにおほえあ  
近にもる

加茂川納涼

大路まのさうりて伴ぬ

春の顔雪とみありく涼の光  
あゆむ風も晒して涼の光

あつれいさあつれい

角乃まの石も若合ふ涼の光大路  
川風も人よとあつてすみか 寛次  
あつれいさあつれい

涼乃つらさあつて

涼河を流るるも涼し水車  
いまもあつてさうりもさぬ九曲乃涼思ふ

て浪急り浦より松不つのをよみ舟よりなり伊  
豫乃周志のつよよなむひも今宵のつり一の  
おもしろいおもしろい都はありて故人  
八傳親の集り飲む能浦乃司野も生  
るるありしをなれども多し故人も失くぬ月  
を思ひのりて隈なきをた

旅して久衣命も夢や瓜名月

お浪花を舟より川にのり何事も  
おもひ生ぬるし

おれおれもおそろしきとて波出まて横は海  
吹けも舟より舟に沖乃のこ舟は福は  
室は若葉半舟月も出ぬ人さし波より  
名もあふ室月舟より舟より舟より舟より  
あけぬ

舟より舟に枕を長し夏舟月

音頭乃浪乃

お浪は盛乃しを盛て海を過り夢は故人を遊ぶを  
おもしろいおもしろいおもしろいおもしろい

こゝろあゆむおまへは海かこ木るら森の梢に  
輝つれてうらうら山や花ひらり

岩嶋

おのれ浦の舟のうら海に身をまかせ  
おのれ浦の舟のうら海に身をまかせ  
おのれ浦の舟のうら海に身をまかせ

おのれ浦の舟のうら海に身をまかせ  
おのれ浦の舟のうら海に身をまかせ  
おのれ浦の舟のうら海に身をまかせ



片

あまのこゝろをいふ人ぞ我をたづねていふ

追風をいふまきの涼しうらな海

舟の彌山

月七のまや西の紅の夏木立

これぞ柳の浦の船をいふまきの阿弥陀寺の舟に  
あまのこゝろをいふ人ぞ我をたづねていふ

牧原の舟をいふまきの阿弥陀寺の舟に

あまのこゝろをいふ人ぞ我をたづねていふ

阿弥陀寺

肌入のこゝろをいふ人ぞ我をたづねていふ

宇佐八幡

舟の涼し夏哉乃あまのこゝろをいふ

あまのこゝろをいふ人ぞ我をたづねていふ  
あまのこゝろをいふ人ぞ我をたづねていふ

西へ出る月追つめて 藤原の舟

七夕 彼舟のまき

西多坊の舟をいふまきの阿弥陀寺の舟に  
あまのこゝろをいふ人ぞ我をたづねていふ



て予に於たりしを悔ひ雨を信まるともよも長崎の  
ちの舟乃舟なるん今宵此より控りて居  
るまゝとす

天能戸や雨より我めて二日星

夜も寝て即ちおれもさるる旅の人をん  
此白とて古里志しと程に坐るも妻や  
あゝんも於あゝれおほえぬ

長崎

入舟やみぬ旅土乃秋能風

彌山之吟を評する辭

舟羽

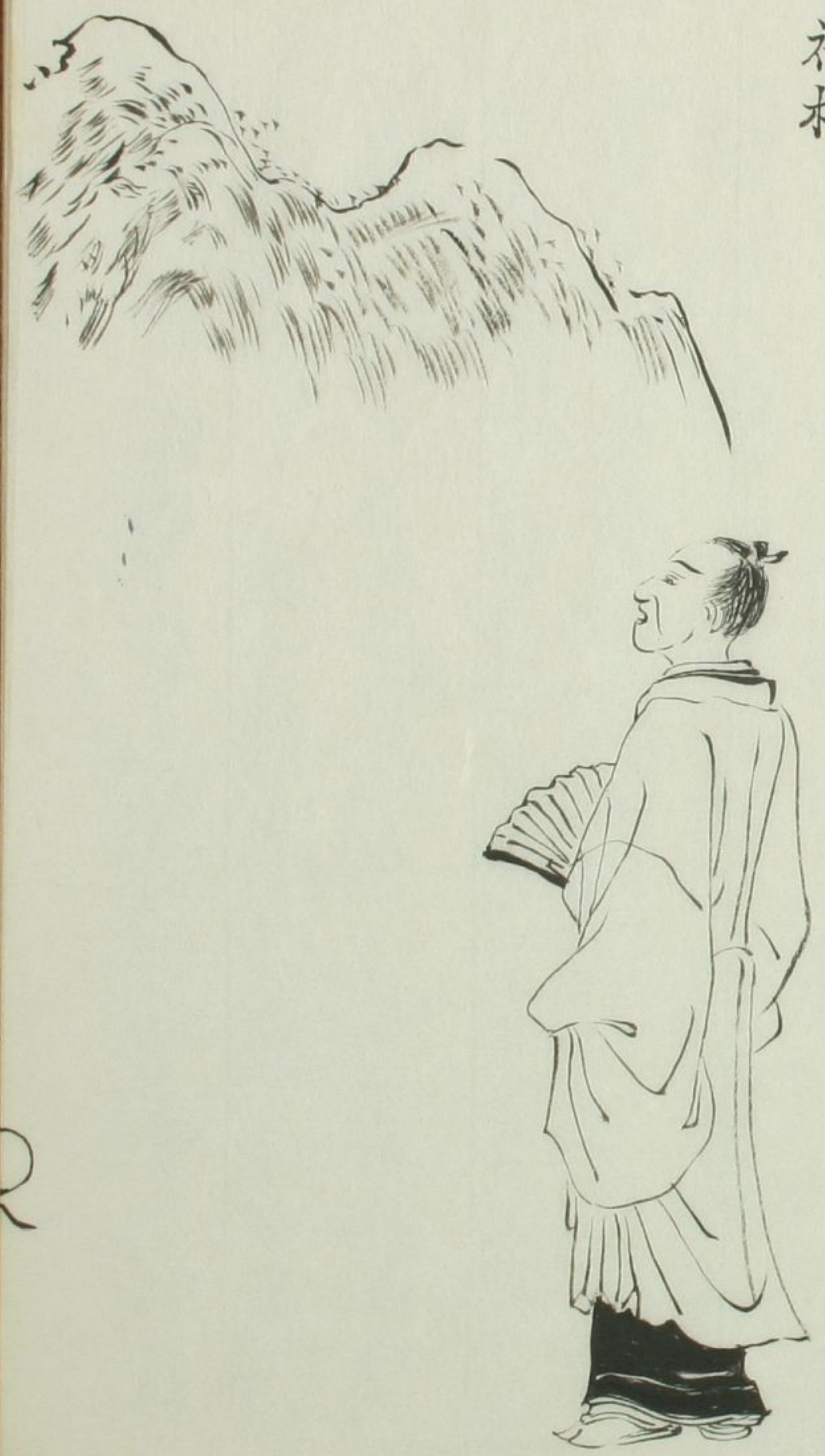
月七いまや西之れなるも夏木立

吾徒難して曰侍師始句あ教日を計  
教る月乃未なるん一むきに東白と  
いそんとて紅糸乃寧境を失ふと  
口おし舟羽曰月よき故乃五文字寧と

寧鏡をたきり涼山乃懸空東西をこま  
 波みひるり夕日よひあひて月もさか  
 ころぬんとたやれきん乃風流おほ服お  
 乃佳景認めしそて日を忘れくたしそ  
 のまや急月もぬきそく句をかきり  
 たりとせんそ文いよや乃働をうて西を  
 夕陽乃くきを化り南をまき夏末  
 ちり吹く風もさかぬんといふて向土相  
 見く笑ふ莫逆於心

寒葉齊建凌岱字孟喬為漢画業又遊  
 俳諧呼吸露菴涼侷舊萬景後為以片歌  
 一家者流更書綾太又都目安永甲午春  
 三月十八日没壽五十六葬葛飾牛頭  
 禅林

善盛寫



吸露菴涼紙画と誄をかくせり明後  
正歌并遊々又一宿をなす是予の前  
能師也さすや物故しとせと後馬乃  
今見とありへるは眼ふくむるも年一  
かありしと建思明喪の如しとありて  
女衣くももて笑いとてし書肆醉如  
棺と菴山寄ふ輓一夕烟をかへらるを  
悔せとてとてして碑とて宮一周をむり  
三回を吊ふも此子事試せりし

醉知を去年乃夏思明ハおあしとて  
師の何とて追く隅田河のまじき園ふ  
身よりりしきけし我嗚呼可惜可傷  
家山秋稿ハ宝曆甲戌の秋涼師長崎  
下向乃日記ちり武山此物梓行の志  
ありて割剝ふ命すくめせふなるもひ乃  
幸ふかやとてあふはる中彼を七人  
那りぬれ女稿ちりて人の建つ文なる戸  
不傳とぬるの月といはれ乃言我亦西乃

明く三子軍乃標題法佛の教年  
かたひのち福の授あき八印本とれし  
法要の布施ふかむ心事をばり  
お新のまの買れし向ふもこも後日花  
百句を喰し捨番と後子供平時  
安永九年庚子三月十八日

荏七神田玉他一陽井素外傳也

### 題花

花乃前ふまや昔れむと云  
眼みてりるもの花小毘陀陀師  
渡舟や朝東風とる花とけ  
月午也也只一面う花乃登  
道かへまゆる大師や花の奥  
寂しあうあをう不降雨れ日ハ  
城跡う一橋れあう花と東  
虚り信乃う花と乃あまの

あゝ世に花より人出路とて  
其〜〜價何れと花乃陰  
おぼろそ枯き〜身を休めけり  
昔事〜花ま〜昔若木此徳人のを  
蝶〜〜〜〜かされてち〜  
宗執乃あや識〜大書院  
申〜〜〜京をを〜歩行る  
姜暁〜〜し花を〜廊の旭語  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜

云ほの可けき花〜死乃をり夜  
候乃雪〜〜〜〜花  
眼を〜〜〜〜  
又〜〜〜〜  
昔〜〜〜〜花乃雪  
その花能〜〜  
彼〜〜花〜  
其〜〜人〜  
その〜〜

下馬札と云ふ阿の寺に此傳入也  
是ももあつてもいふや酒の女  
妻の子傳あつていふもや妻はあ  
初はりまゝいふとと孫の月  
鉢勝よもせと人此を乃若くは  
晚鐘ふもいふもせしあつたり  
あつる屋もあつたはあつたり雨  
あつては胡蝶の何れは遠れぬ  
あつたりあつたり人孫也花頂山

おむき猿の風より軽し云々枝  
藤袖ふいねもく向ふも吹雪  
是れ雲降るもあつたかへりも  
はくもあつたあつたあつた  
久しうも人あつたあつたあつた  
弾子もあつたあつたあつた  
はあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた



降しつゝ花や幸ひおまほ  
おとこも人法味子や夕日夜  
かへおまほととおおおまほ  
都さへ花は見れ肩車  
四さへ不盡もかまひへ花あへ  
咲千子おほほととと里は  
林間へ冷酒より花日  
東や下へ花も小き花もかまひ  
はへへ人さへ花の隣乃堀は

お相ふちいお体も花の隣  
おまへお花も花の隣  
立休へ花も田中へ花も  
おまへお花も花の隣  
おまへお花も花の隣  
おまへお花も花の隣  
おまへお花も花の隣  
おまへお花も花の隣  
おまへお花も花の隣  
おまへお花も花の隣



なふ其お神のおあしれきたるおの幕  
蛇乃きるをを困る一又る日このか  
茶徳珍山石きりしよよも河  
あふん念させるおあしり浪人  
いてはくふあし何をもかきし  
時なまらふおあふんおふも部山  
むりし誰かおあしあふんれ  
池しおあふんおあしおあし  
おあしおあしおあしおあし

餅屋とてはあまのこに  
余はししるしれしれおあし  
おあし乃おあしおあし  
おあしおあしおあしおあし  
おあしおあしおあしおあし  
おあしおあしおあしおあし  
おあしおあしおあしおあし  
おあしおあしおあしおあし  
おあしおあしおあしおあし  
おあしおあしおあしおあし  
おあしおあしおあしおあし  
おあしおあしおあしおあし

さほ姫のよめい物あはせりし  
茶はうり佛ふあはせりし

一陽井藏板

江戸室所三丁目

須原屋市兵衛

書林

昭和十四年六月十五日寫校合了  
原本 松字文庫 中村俊定藏

昭和十四年七月十六日影寫校合



